

---

# スケベな幽霊

タケノコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スケベな幽霊

### 【Nコード】

N1914I

### 【作者名】

タケノコ

### 【あらすじ】

不慮の事故（パンツを見て）によって、幽霊になってしまった男の物語。彼は自身の霊体を活かしてスケベな事を試みる。彼の行く末に待っているものは……

## 第1話 幽霊になった男（前書き）

コメディイものです。なかには卑猥ひわいな表現がございますので、そういったものが苦手な方はご遠慮ください。



『はあ、はあ。いったい何だったんだ？』

幽霊が先ほどの美男子を見ると、外人に抱き着き上気した顔を擦り寄せる美男子の姿があった。

『あ、あの美男子、ホモってことか！？ってことは俺の女に対する桁違いの性欲とあの美男子のホモな性質がいまっぴらな異常行動を起こしたのか…』

少し思案する幽霊。

『…それなら…このてでいくか！』

ここは、場所が変わってデパートの女性下着売り場。

『これなら完璧だろう』

とエッチな幽霊の声した。

しかし、どこにも幽霊の姿は見当たらない。

『あ、この下着かわいい！』

美人でスレンダーな女性がフリルの付いたかわいいパンティーを持って、試着室へ足を運ぶ。

『来たぞー！俺の時代来たー！』

なんと、幽霊の声はそのパンティーからするではないか。

『ウヒヒ、これは成功だな』

閉められる試着室のカーテン。脱ぎ置かれるスカート。ついにパンティーに手をかけた女性。

『パラダイス！いらっしやーい』

女性はパンティーを台の上に置いた。

『…！！』

女性の股間には黒光りする蛇がいた。

『グアアアアアー！！』

顔面(?)蒼白になる幽霊。パンティー

女性(女装趣味の男)はパンティー(幽霊)を足に通し、引き上

げた。幽霊バンテューに迫り来る黒蛇。

『いやだあ—————!!!』』

下着売り場に幽霊の声がかたました。

{}つづく{}

## 第1話 幽霊になった男（後書き）

後書きまで目を通していただき、ありがとうございます。次話は、早目に投稿出来ると思います。また、連載作品ですがあまり長くはならない予定です。最後まで読んでいただき大変ありがとうございます。

## 第2話 めげない幽霊(前書き)

第2話です。生暖かい目で見守ってあげてください。



## 第2話 めげない幽霊

ここは深夜の公園。

若いカップルがベンチに腰掛け、今にも男女の交わりを始めようとしていた。

「大丈夫かな…この公園、まじに幽霊でるらしいよ…」

怖がる女の子を金髪の彼氏がなだめる。

「噂だよ、噂。ただの噂なんだから、本気で怖がるなよ」

「ハアハア…」

「い、今なんか聞こえなかった？」

「き、きのせいに決まってるだろ」

「あの木の裏辺りから聞こえたわよね？」

木の裏を覗き込む二人……。

「…なにもいないじゃないか」

と言いながら彼女の方を振り向く彼氏。

彼女の真横、そこには　　！！

「ハアハア、パンティ、パンティー！！」

と泣き叫ぶ大きく、黒い犬がいた。

「「ギャアアアー！！」」

人語を話す犬に逃げ出す二人の男女。

「この方法もダメか…」

ホモと黒蛇事件以来、消極的な手段として犬にとりつき男女の密会を盗み見ようとしていたのだが

『俺ってば、興奮すると声がでちゃうんだよなー』  
犬から抜け出したエツチな幽霊は妙案を思い付いたような顔で飛び立った。

辺り変わって、美少女揃いと名高い女子校。その敷地内にある女子寮の中、もくもくと湯煙があがる大浴場があった。

『ムフ、楽しみでしょうがない。今度はなにも問題ないしな。なんせお湯にとりついたんだから』

煙立つ湯舟のなか天女たちの来訪を鼻の下を長くして待つ幽霊。

ついに、お風呂場の戸口が開かれ女の子達が入って来た。

「さあて、汚れてるからひと洗いしよっかなー」

ほくそ笑む幽霊（お湯）。

「洗ったし、次はお風呂にしようよ」

笑いが止まらず波打つ湯舟のお湯（幽霊）。

湯舟を覗き込んだ女の子。その顔はそこらへんのアイドルよりよっぽどかわいかった。

「えっと、ここらへんよね」

そういうと、美少女は湯舟の中に右手を突っ込んだ。

（あつ、あん！大胆！）

喜ぶお化け（温かい水）。

「あつたあつた。えい」と言うと女の子は右手を引っ張った。

（あ、うん）

女の子の手の動きに一々喜ぶ幽霊（お湯）。

ゴボゴボと響く水の音に冷静さを取り戻した幽霊はかわいい女の子が体操服を着ていることに気付いた。

（ま、まさか…）

「お湯が抜けたら、中もさっさと洗っちゃいましょう」

「「賛せい！」」

幽霊は必死にもがいたものの……

『いやだー！まだ体操服しか見てな グボボボ 』

「風呂当番終わりー！これからみんなで、カラオケ行こうよ」

「「そっしょー！」」

{くっくく}

## 第2話 めげない幽霊（後書き）

次回で最終話になりそうです。なるべく早めにと投稿できるようお願いいたします。

### 第3話 覚醒した幽霊（前書き）

今回で終わる予定でしたが、書きたいネタができましたので後少しだけ続けさせていただきます。

### 第3話 覚醒した幽霊

ここは夜の静まり返った道路。

幾度も重なる失敗。それでも負けない幽霊は下水より舞い戻った。  
『エロースは永久に不滅なり!!』

幽霊の不屈なスケベ精神は新たな能力を目覚めさせた。その一つが

『ハアー!!』

幽霊が念じると近くに落ちていた空き缶が空中に浮かび上がったではないか。

『フフツ、これを使えば!ワハハハツ!』

ここは前回、惨敗をきつした女子校前。

スケベな幽霊は登校してくる女子校生を品定めしていた。

『あの娘が良い!!』

幽霊はとびつきりの美人で神秘的なオーラをかもし出す女子高生に白羽の矢をたてた。

『早速いくぜ、おりゃー!』

幽霊は念力でスカートを持ち上げ、お待ちかねのパンティーを拝見しようとした。

しかし

『あなたは悪霊?』

狙い定めたはずの力は逸れゴミを抱えた隣のおばさんの長いスカートを捲り上げ、デカパンツをあらわにした。

『!!!...おまえはいつたい!?!』

幽霊は度重なる失敗でかなり謙虚になっており、おばさんといえども、しっかりデカパンツをおがみながらも質問する。

「私は除霊士。悪いけど私にはたらこうとした狼藉は見過ごせないわ！あなたみたいな悪霊には…」

美しき除霊士はセーラー服の胸元から二枚の紙を取り出し、スケベな幽霊に向けて放った。

「挿せ！前門のホモ鬼！！貫け！後門のニューハーフ鬼！！」  
二枚の札は煙と共に変化した。

一枚は、スケベな幽霊を見て、舌なめずりする巨大な赤鬼に、もう一枚は顔に白粉を塗りたくり、赤い口紅でアクセントを付けている大きな青鬼へと。

（赤鬼）「美味しそうな幽霊だなー」

（青鬼）「可愛がってあげちゃうわ〜ん、ウフ〜ん」

「よりによってなんでこんな目に…」

ぼやくスケベな幽霊。

二体の鬼の手には、金棒ならぬ、巨大なンポーが握られていた。未知の怪物に腰を抜かし、はって逃げ出す幽霊。

『お、俺にそんな趣味は無い…ぜ、絶対イヤだ』

しかし鬼達の動きは素早く、一瞬で追い付いた。俯せて這って逃げる幽霊に向け青鬼が特大のンポーを振り上げた。

（青鬼）「いくわよ〜ん？」

『ギョエエー！ー！！』

エツチな幽霊はど偉い目にあつた。とても描写出来ないようなことばかりだ。

『まだだ、まだ俺は負けねえ……………』

何とか川に落ち延びていた幽霊は岸にたどりついた。

『…まだ手はある、もう一の能力……………その力を見せ付けてやる……………』

くっくくく



### 第3話 覚醒した幽霊（後書き）

後書きまで目をとっしていただきありがとうございます。一日一話  
ずつで最後まで書いていきたいと思えますのでよろしくお願いしま  
すm(\_\_\_\_)m

#### 第4話 幽霊はハーレムを作る(前書き)

最後にオチが来るショートショートです。意見や指摘等参考になるコメントが頂ければ幸いです。

#### 第4話 幽霊はハーレムを作る

幽霊が手にした、三つの内の二つ目の能力、それは「ベタ惚れウインク」といって、人間にとりついた状態でウインクしたら、された相手がした相手にぞっこんになるというものだった。

「もう一つの能力、ベタ惚れウインクをもつてすれば、ハーレム作りも楽勝だぜ」

銭湯の煙突の上、下界を見下ろすスケベな幽霊。

「あそこにするか」

幽霊は人だかりが出来ているスクランブル交差点へと飛んだ。

「いるじゃないか、美少女、美女にと山ほど！イベントかなにかだろっ」

そのスクランブル交差点では野外ステージが作られ、大型モニターにステージで踊る美男子達が映しだされていた。それを応援する女の子達の容姿のレベルが極めて高い、しかも男がいない。

「あのモニターのカメラ、あれにベタ惚れウインクを行えば…ムフフ」

早速、カメラマンにとりつき、カメラの前に来た幽霊。

「さあて、ハーレム作っちゃおっと。くらえ！ベタ惚れウインク！」

すると、美男子達を応援していた美女達がカメラマン（幽霊）を取り囲んだ。

「やっと永年の夢が叶った」

元幽霊は、近くにいた長い黒髪が流れるように美しい美女にキス

をした。

「たまりません！感動した！！」

そして、その美女の股間に手を伸ばした元幽霊。

「！！！！グワァー！！！！」

そこには、女の子にあつてはならぬものがあるではないか。

「どうということなんだ！？誰か説明してくれ」

元幽霊に、熱い視線を送る美女（？）が話し始める。

「愛しいダーリン、このイベントは最近出来た特殊メイクの宣伝を兼ねたイベントなの」

その女の子の声は野太くまるでオッサンではないか。

「といことは……この美少女達はみんな……」

「そう、特殊メイクされた男たちよ。ダーリン」

寒気を感じた男は、徐々に後退りしながら

「……ちよつと用事思い出しちゃって……さいならー」

口を拭いながら、全力でダッシュするカメラマン（幽霊）。

「逃がさないわよー」

と凄く低い声。

「今日は朝まで離さないんだから」

とオッサンのガラガラ声。

二百人ぐらいはいる見た目は美女、実際はオッサン達に追われながら

「こんな、ハーレムはいやだー！！」

自身の運の悪さを嘆く幽霊がいた。

{}つづく{}

#### 第4話 幽霊はハーレムを作る（後書き）

後書きまで目を通していただき、ありがとうございます。早めの更新を今後も続けるよう努力します。

第5話 幽霊と闇の組織と女子高と（前書き）

意見や感想等いたたけると執筆の励みになるのでお願いします。

## 第5話 幽霊と闇の組織と女子高と

『ふふ、おれがどこにいるかって？前に、敗北をきつした女子校があつただろう…』

周りに誰もいない事を確認したスケベな幽霊は続ける。

『そのの、トイレの洋室の中さ。つまり便器にとりついたってわけ！あー、柔らかいお尻まだかなー』

そんな中、その女子校に暗雲が立ちこめ始めていた。

『準備は万端か？』

と黒色の服の男。

『ええ、いつでも女子校をやれますぜ』

それを聞いてニヤつく黒服の男。

『この女子校もおしまいだな！ワハハハッ！！』

『やべ、腰吊つた！イテー』

『破壊こそ全てだ。今こそ、世界に闇を！…』  
とリーダー格の黒服が言つと。

『ハッ、全員定位置に付けー！！突撃まで【3】』

【2】

『あー、鼻痒い！』

【1】

『ハクシヨ【0】』

怒涛の勢いで崩壊する女子校。

「さっきの雰囲気作り、現場監督の趣味っすか？」  
と黒服の男。

「たまには、違ったことをしたかったんだよ」  
そう言う現場監督は満足顔。

「それで、新しい校舎のみとり図が……」

『どんなタイミングやねん！』  
と瓦礫の中からはい出た幽霊。

ひ  
つ  
つ  
く



**第5話 幽霊と闇の組織と女子高と（後書き）**

次回はスケベな幽霊は温泉に向かいます。

## 第6話 幽霊は温泉に行く

ここは、知る人ぞ知る秘湯。その温泉のロビー。妙案を思い付いた幽霊はここで待ち構えていた。

美人が浴衣姿で歩いて来た。

『あ！美人ちゃん発見！とう！』

幽霊は美女の腕の中にあつたタオルに取り付いたのだ。

『これで！美女の柔肌に：ムッフ』

『まだかな、まだかなー、柔肌の・美人はまだかなー』

ここは女子更衣室。タオルにとりついた幽霊は美女の帰りをロッカーの中で待っていた。

『来たか！』

『気持ち良かったー』

そう言う声と共に温泉へつながる戸口が開かれた。

『なんだー、おばあさんかー』

八十代の白髪のおばあさんが更衣室に上がるやいなや

『あたしのタオルはどこにおいたかねー』

と言い。幽霊がとりついていたタオルを取った。

『うわ！』

『あつたあつた。さて股から拭くかねー』

そう言うタオル（幽霊）をおばあさん自身の股間に近づける。迫り来る老婆の股間。

『グアアアアアア！！』

「一仕事終えたタオル（幽霊）はぐったりしていた。」

「まだ…なの…か」

そこで、戸口が開いたそこには、二人の女神の姿が。

「気持ちいいから長湯しちゃった」

それは、幽霊が鼻の下を長くして待った美人。

「ええ、そうですね」 この声は最も聞きたくなか……

「お前はパンチラ好きの悪霊！ 果たしても不埒な行いを……！」

そう、二体のおぞましい鬼を使う美少女除霊士。

「ち、違うんだ！」

麗しき除霊士は薄手のタオルで身を隠しながらも、どこからとも

なく二枚の紙を出し、幽霊に向け放った。

「問答無用！！二鬼融合……！」

二枚の紙は、緑の炎をあげながら重なり一枚になった。

「穿て！！貫き鬼……！」

一枚の紙は煙と共に緑色の鬼に変化した。前の鬼より一回り巨体であった。

（緑鬼）「さーて覚悟は出来てるんだろうな！」

スケベな幽霊はタオルから抜け出し死に物狂いで逃げ始めた。

（緑鬼）「いくぞ！！たあ……！」

緑鬼は自身の股間に手をやり超巨大な ンポーを引きちぎり、突進してきた。

「いやだ！あれだけは……！」

鬼は全身全霊の力を込めて、尻を向け逃げる幽霊に ンポーによる突きをくりだした。

（緑鬼）「秘剣！刺突……！」

「ギョエ……！！……！！……！！」

今日も、この世に悪は栄えないのであった。

## 第7話 幽霊VS

今は、夜。

「ここは、この世を旅立ったもの達が集う、憩いの場所「ストーンタウン」。

「かつこ良く言ってるけど、ただの墓地だろ」

とスケベな幽霊が独り言。

「やけに賑わってるな！？なんかあったのか？」

近くにいたスポーツ刈りの幽霊にスケベな幽霊が尋ねる。

「うん？ああ、おいどんが聞いた限りでは、おいどん達が脅かしても、逃げ出さない人間がこのストーンタウンに来ているらしいですわす」

「それでみんなが競い合ってるんのか？」

スケベな幽霊はさらに質問する。

「そうでごわす。あんたも行ってみたらどうでごわすか？」

・  
・  
・

「あいつだな！なんか白い装束来てんな」

木々の隙間からスケベな幽霊は観察する。

「霊圧を上げて、のっぺらぼうモードにチェンジっと。では、行くか」

姿が一般人にも視認できるようになったスケベな幽霊は白装束の背後から

「のっぺらぼう！……」

白い装束の人物は振り向くと

「貴方はまちがっていないある」

そう言いながら、五円玉に括り付けている糸の端をつまんで揺すり始めた。

『へ…え…俺は間違つて…ない…』

スケベな幽霊は、左右に揺れる五円玉から目が離せなくなっていた。

「そうある。あなたは満足しているある！成仏すべきある！」  
と白装束。

『…そう、俺は…満足…して…』

トローンとした目つきのスケベな幽霊から天に向けて光が昇り始めた。

『…して…して…してない！まだエッチなことしてない！』

スケベな幽霊は成仏させられるすんでのところで立ち直った。

「むう…失敗あるか」

白装束は残念そうな声を出しながら白い装束を外した。

『か、かわいい』

幽霊の目にしたのはツイントールのかわいいチャイナ娘だった。

「褒めても嬉しくなんかないある！」

そう言いながらも頬を染めるキュートなチャイナ。

「わたしは催眠術師ある。今回は二十三人しか成仏させれなかったあるが次会う時は必ず成仏させてやるある」

そういいながら墓地を走り去る可憐なチャイナ娘。

「…成仏は無理だと思っけど…」

スケベな幽霊には、やり残したことがありますて……。

{ つづく }

## 第8話 幽霊はAVに挑戦する

ここは、AV撮影場所のホテルの一室。  
そこに、スケベな幽霊の姿があった。

「よろしくおねがいます」

男優にとりついた幽霊は監督や撮影スタッフに挨拶をする。

「ところで、今日のAV女優さんですけど…どんな方なんですか？」

詳しく知らずにとりついたスケベな幽霊は質問する。

「ああ、妖精みたいに可愛いこだよ。マリアちゃんっていうんだ。  
なかなかの巨乳だしね」

と監督さん。

「よろしく、おねがいます」

男優（幽霊）が振り返るとそこにはかわいい小柄の女の子が、しかもかなりのポインちゃんである。

「こちらこそよろしく、あなたみたいに素敵な人と撮影できて幸せです」

そついいながら男優（幽霊）は握手を求めた。



## 第9話 幽霊はリゾートに行く

(舞台は海外ですが、日本語吹き替え版でお楽しみください。)

ここは、海外にある常夏の楽園。視界一面に大海原が見渡せるリゾート地である。

『グフフ、ここにヌーディストビーチがあるとの情報が…』

幽霊は、女の子の裸目当てにやってきたのだ。

『やや！遠方にNO水着の女の子発見！とう！』

飛行で一気に急接近

「風じゃのー」

『グワアアアアア！おばあさんかよ！』

がつくりする幽霊の耳に声が聞こえた。

「助けてー！」

沖に流されながらも浮輪につかまっている少女がいるではないか。

『仕方ないなー。とう！』

幽霊は目の前を歩いていたマッチョの黒人にとりつき、海に飛び込んだ。

「今、助けに行くから…ガボボ…ってこの外人…ズブ…マッチョなのに…ジュブ…カナツチかよ…ズブズブ…」

結局、ライフセイバーに救われた二人。スケベな幽霊は外人から出て、新たな作戦にむけ動き出した。

・  
・  
・



ビーチの端、ピチピチのブロンド美女達を前に芸をする野性のイルカがいた。

「このイルカ、人懐ひとなつつこくてかわいいわね」

金髪の美女達が頭を撫なでるとイルカは、仰向けになり尻尾を水に沈め、下腹部をさでてほしそうに体を左右にフリフリする。

「変わったイルカちゃんねー」

「芸をするから、お願い。下腹部を触ってー」

スケベな幽霊は、なんとイルカにとりついていたので。

そんな中、遠くから急接近するものがあった。

「…あれってシャチじゃない！」

美女に触られてご満悦だったイルカ（幽霊）もようやくきずき、全速力で逃げ始めた。

・  
・  
・

「下腹部をさでて欲しいんだって？」

シャチは、逃げるイルカ（幽霊）をからかうような口調で質問する。

「いや、それは…」

「触ってやるよ…この牙でなー!!」

「ギョエー…!!」

死に物狂いで逃げるイルカ（幽霊）。

果たしてイルカ（幽霊）はシャチから逃げ切れるのだろうか…。

ぷっぴくぷ

## 第10話 幽霊と刑事

「ここは警察官の殉職者達くんとしやくが眠るストーンタウンいらい（慰霊牌）。

「…今、現在の幽霊達の悪事には目に余るものがある！…よって、ここに幽霊庁設立を宣言する！！」

慰霊碑の前に立つ立派な警察官の幽霊は、眼前に居並ぶ何百人も  
の警察官の幽霊達に宣言した。

「また、出先機関として幽霊対策公安部隊を設置する！志願者は前  
に出よ！！」

・  
・  
・

ところ変わってスケベな幽霊は……

「お客さん着きましたよ！」

とタクシーの運転手。

『やっぱり、女の子のお尻はやわらかいなー』

タクシーの後部座席にとりついてた。

「はい、ちょっとまってね小銭落としちゃって…」

とOL風の美人。

『幽霊さん！物にとりつく行為は幽霊法によって禁止されているのよ！』

と美人が幽霊語を喋りはじめ驚くスケベな幽霊。

『可哀相だけど向こう（天国）に送ってあげちゃうわ！』

そう言うと美人は、ポケットからピンク色の拳銃を取り出した。

スケベな幽霊は慌てて飛んで逃げる。

『危なかったー』

『逃げきれたつもり？』

空飛ぶ幽霊が隣を見ると、さっきの美人が霊体化して横を飛んでいた。

『お前は幽霊？…人間にもなれるのか？』

とスケベな幽霊。

『バカいわないで。あの子は協力者で私の双子の妹よ！色狂いの幽霊にはこの快感銃が一番ね！』

先ほどのピンク色の拳銃（透けてる）をスケベな幽霊に向け、かまえる。

『私は公安部隊隊員、心之桜。私があなたを冥土に送ってあげる！』  
桜が放った、数十発の弾丸がスケベな幽霊に襲い掛かる。

『クソ、弾は無制限かよ…、俺の名は、アン！って名のらせるー！』  
スケベな幽霊も、かつこよく名のろうとしたのだが、右足に被弾し天に向かって少し光が昇る。

『ふふ、もつと気持ち良くして天国に行かせてあげる』

もう、一丁のピンク色の拳銃を取り出した桜は、飛んで逃げるスケベな幽霊に神速の勢いで快感弾を撃ちまくる

『…あん！…いい！…うん！…ハアハア！』  
何発も撃ちぬかれたスケベな幽霊は背後を岩山の前には桜と絶体絶命のピンチを迎えていた。

全身から光を天に向け立ち上げるスケベな幽霊。

『…最後に言い残すことはない？』

と美人の桜（幽霊刑事）。

『はあはあ…俺の名は…アン！って言わさして！お願いだから！』  
名前を言う直前に撃たれるスケベな幽霊。  
『分かったわよ！どうぞ』

『俺の名は…横嶋奈心だ！』

ボロボロだが胸を張り格好をつけようとする横嶋。

『ふん、あなたらしい名前ね！いき地獄を味わいなさい！百烈瞬神弾ひゃくれつしゅんしんだん！！』

桜（幽霊刑事）の構えた二丁拳銃がピンク色の光を発し、数えきれぬ程の快感弾が横嶋を襲う

『あ！うん！あふ！やん！あひや！いん！うふん！えひ！ん！わひ！あひ！あは！あん！やん！うん！……』

……』

横嶋のいた場所から、モクモクと煙があがるなか、天に向かって凄まじい量の光（横嶋の霊体れいたい）が立ち昇っていった。

『あれだけの霊体を失ったら幽霊神様達ゆうれいしんでもこの世に存在することはできない。……勝った！……力を使い過ぎちゃったみたいね……』

ぐったりした桜は、東に向かって飛び去って行った。

・  
・  
・

煙がはれたその場所にはあの男の姿が

『……危ねー、向こうに逝っちまうところだった！』

幽霊の神さえ滅ぼす攻撃も、この男にとっては

『それにしても、気持ち良かったなー！』

彼の有り余る性欲は神の力をも凌駕りょうがしていたのだった。

《^UJ》

## 第11話 幽霊はキスシーンをものにする

「君の心が最も美しい！」

公園のベンチの前、役者に取り付いた幽霊が一人、台本片手にテレビドラマの練習をしていた。

「君さえいれば…僕は…この後がブチューだな。フフツ」

スケベな幽霊は美人女優との熱いベレーゼを目的に男優に取り付いたのだ。

「さて、撮影に行くか」

・  
・  
・

ところ変わって撮影スタジオ。

「ハイ、カット。みんな良いよ！次はいよいよ主役とヒロインのキスシーン行ってみよう」

と調子よく監督が話しを進める。

(待ってました！ミスして二十回ぐらいキスしちゃおーっと)

そう内心たくらむスケベな幽霊。

「おい！お前は主役なんだからキスシーン、一回できめるよな！二回目は無いと思えよ！」

と監督から注意が元幽霊にとぶ。どうやら前々から反りがあってなかったようだ(監督と男優が)。

撮影スタッフの一人がスタジオに飛び込んで来て。

「す、すいません。ヒロインの女優のかたが病気で入院したそうです。なので代役の方を呼んでいます」

「よ、よろしくお、願います」

代役の女性は明らかに歯で不細工だった。

・ (監督) 「アクション！」

(幽霊) 「君の心が最も美しい！」

・ (幽霊) 「君さえいれば…僕は…(できねー)」

・ (監督) 「ハイ、カット！」 (監督) 「ちゃんとやらないと、次回の美人女優との抱き合うシーン無くそうかなー」

(幽霊) (頼むからこのシーンなくしてよ)

・ (監督) 「もう一回ね。はい、アクション！」

・ (幽霊) 「君さえいれば…僕は…僕は…僕は…」

(監督) 「カット！」「僕は」は分かったから。次しないと終わんな  
いよ」

(監督) 「はい、アクション！」

(幽霊) 「君さえいれば…僕は…(なにくそ)ブチユーー(は、  
歯が刺さってる。イテー！)ーーー(ってまだかー！)ーーー  
ー(こら、監督寝るなー！)ーーー(こ、こら勝手に舌を入れん  
じゃねー)ーーー(お、おいブス、噛み終えたガム渡すなー)ー  
ーーー」

(監督) 「ハイ、カット！」

(監督) 「イマイチだな。もう一回ね。はい、アクション！」

・ (幽霊) 「(くそ監督が！)君さえいれば…僕は…付き合ってもら  
るか！..」

そう言つと、頭に来た幽霊は男優から出た。

「悪い事は駄目か…それなら..！」



新たな思いを胸にスケベな幽霊は飛び去った。

}つづく{

## 最終話 幽霊は責任をとる

しばらくして、幽霊は美男子の俳優と精神完全合体（一生この体から離れられない。最後の三つ目の能力）を行っていた。

「これからは、この体でまっとうに生きるんだ！」

人の体を奪つといてまっとうも何も無いのだが。

「さて、舞台も終わったことだし、将来のワイフを探すか」

劇場を後にし、美少女探しに熱をあげようとしたとき

「私、あなたの赤ちゃんができたの！！」

元幽霊は美しい顔を声のした方に向けると、そこには、かわいいショートヘアの若い女の子が立っていた。

呆然とする元幽霊。

「……人違いじゃないのかい？」

泣き出す女の子。

「ひどい！！私は初めてだったのに！！」

有名な俳優（今は幽霊）がいざこざを起こしてたのに気付いた周りのギャラリイが喚き出した。

「え…えーと、そうだなあ、とりあえずどこか落ち着いて話ができるところに行こう」

ここは、劇場近くのカフェ。その中で二人は向かい合って座っていた。

元幽霊は思案していた。

（俳優に取り付いたのは二日前、特に何もしていないのだが）

「…俺達は恋人だったのかい？」

ふるふると顔を横に振る女性。

「一月前、お酒の席で一緒になって…それで…」

(この体の前の持ち主。こんな、いたいけな女の子を！)

そんななか、気が強そうな和服を羽織った女性が俳優(幽霊)に近づいて来ていた。

「で、でも一回ではできないんじゃない？」

「一回じゃありません。五回です！」

頬を赤らめながら反論する女の子。

和服の気の強そうな女が俳優(元幽霊)の襟首を掴んで引きずり上げた。

「アンタ！！あたいの責任をどうとつてくれるんだい！！アンタが種無しなんて嘘言うもんだから！子供ができちゃったじゃないかい！！」

気の強い女の後ろには、屈強そうな二人の男が立っていた。

(他にもかー！前の体の持ち主、どんだけスケべなんだー！！)

気の強い女を振り払って一目散に逃げる元幽霊。

「あ、ちよっとお待ち！あんたら後を追いな！！」

「くへい！！」

ここは、前登場した女子校の校門前。

自身の能力ではこの体から抜け出せない幽霊はある人物に頼ろうとしていた。

「た、頼む！この体から出してくれ！」

そう土下座しながら言う俳優(幽霊)。

それに向かい合うのは、美人除霊士。

「…中に入ってるのはいつかのパンチラ好きの悪霊！」

セーラー服から紙を二枚取り出した除霊士。

「ヒイー！今日は悪さをしにきたんじゃないやなくて、助けてもらおうと思って…かくかくしかじかで…」

「つまり、まっとうに生きようと思ってその体と完全に合体したけど、元の人物が色情狂でいるんなところに子供を作って困ってる。だから、その体から出して欲しい。そういうことね」

頷く、俳優（幽霊）。

「残念だけど無理よ！」

「！！」

驚き固まる俳優（幽霊）。

「完全に一つになったら、もうどうする事もできないわ」

しよげ返る俳優（幽霊）。

「みんなの責任をとってあげることね…私も含めて」

美しい除霊士は自身の少し膨らんだお腹を優しくさでていた。

「ま、まさか！！？」 動揺する元幽霊。

「ええ、そうよあなたの子よ。私とあなたが入ってる俳優はフィアンセだったの」

呆然とする元幽霊。しかし、意を決した表情になり

「わかったよ！俺、三人の夫になる、そして生まれて来る赤ちゃんたちを立派に育ててみせる！！」

「そ、それ本当ですか！？」

といつの間になっていたのやらショートヘアの女の子。

「さすが、将来の夫だよ」

そう言ったのは二人の子分を連れた気の強い女性。

「ああ、もうなんでも！どんとこいつてことよ！！」

強気になった元幽霊。そんな彼の耳に遠くから声がした。

「私もできちゃったー！！」

「一年前にしたよね！これあなたの子よ！」

「早く名前を付けてちょうだい！」

俳優（幽霊）が校門前から、東を見ると何十人もの女性が、ある人は赤ん坊を抱え、ある人はお腹を膨らませて、走ってくるではないか。

一瞬、考えた俳優（幽霊）は、その場から全速力で駆け出した。

「俺はまだ何もしてねー！！」

朱く染まる空の下。叫びながら走る、一人の男の姿があった。

「この体の前の持ち主は、どんだけスケべなんだー！！！！」  
「どんな事にも、上には上がいるものである。」

「おしまい」

## 最終話 幽霊は責任をとる（後書き）

このストーリーはこれで終わりです。目を通していただいた方々に感謝を込めてありがとうございます。

## もう一つの最終話（前書き）

最終話は二本作ってしまっていて、もう片方もせっかくなんでだしと  
きます。

## もう一つの最終話

ここは、幽霊裁判所。ついにスケベな幽霊こと横嶋よこしまは取っ捕まったのだ。

『皆さん静粛に！これより横嶋よこしま奈心なこころに判決を言い渡す！！』

裁判長である白く長い顎ひげが自慢の北の幽霊神が落ち着いた口調で続ける。

『被告横嶋奈心に一日女性ホルモンだだもれ美女の刑に処す！』

横嶋は右腕に霊体の力を封じる腕輪をされていた。

『はっ！？美女？じよあ、ひとり……』

ぎらりと光る裁判長の右目。

『ただし、一日の行動はこちら指示する！監視の目が光っていることを忘れるなよ！』

しょんぼりする横嶋。

・  
・  
・

さてさてここは、通勤の満員電車の中。激しい痴漢が繰り広げられていた。

「ハアハア……おしり おしりー！」



眼鏡をかけた男はひたすら同じ作業を繰り返していた。

「くそ」

セクハラを働かれるがわの女は凄まじい美女だった。

（ひたすらたえないと駄目なんだったな…くそー、逆なら良かったのにー！）

そう、この美女は刑が執行された横嶋だったのだ。

「クンクン！！ムフー！！」

と肥満ぎみなオタクふうの男。

（グワーーーー！！）

「やわらかい！」

そう言ったのはサラリーマン。

（早く！次の駅つけーーーー！！）

ひたすら耐える美女に入った横嶋。

・  
・  
・

あるバレリーナ教室でマンツーマンでレッスンを受ける髪をまとめて上にあげている美女（横嶋）の姿があった。

「…はあい、わん、つう、わん、つう、頑張ってーん」

相手の講師は化粧が厚く角刈りの髪型とおひげがチャームポイントのお姉さん（？）。

「足はここまで上げてーん」

と講師のお姉さん（？）が後ろから美女（横嶋）の右足を持ち上

げる。

(イテテテテ！ひげ！ひげ当たってるて！うなじ痛い！)

「なかなか良いわよ〜ん」

(鼻息かけすぎだー！！)

・  
・  
・

今の時刻は夜中の七時。ぐったりした美女(幽霊)は夜道の路地を歩く。

「ハアアア……気がめいる……後少してゴールのストーンタウン(墓地)だ……」

美女(横嶋)は、自身の響かせる足音が二つ聞こえることに気付いた。

立ち止まる美女(横嶋)、もう一つの足音も止まる。

「……ストーカーとか無しですからね」

後ろを振り向く美女(横嶋)。しかし路地にはなにもいない。

「な、何もいないじゃないか」

そういいながら顔を元に戻すとそこには

「マジストーカーじゃねえか！レイプ我慢すんのは勘忍だぞ！」

黒いシルクハットに黒いオーバーオールを着た男がいた。

「こんばん…ガバーー!!」

オーバーオールを大きく開き卑猥なものを見せられた美女（横嶋）なのであった。

「汚いもん見せんなー!!」  
と美女（横嶋）。

・  
・  
・  
ここは、ストーンタウンにある裁判所（北の幽霊神のお墓）内。  
「…これで女の子の気持ちがあったらう。今後は心を入れかえるんだぞ!」

北の幽霊神は霊体になった横嶋を説得する。

「……は、はい。わかりました」

流石に懲りた横嶋は心の底から反省した。

しかし、横嶋の下半身は新たな性癖に目覚めつつあった。

「おしまい」

## 新第1話 スケベな幽霊の孫

今は常夏。ここは海水浴場。そこで事件が起こった。男が海の中から女子大生風の女の子を見ていて波に掠われたのだ。男は鼻血をダクダクと流しながら言った。

「水着がとれるなんて、最高！ 乳首が見えたぜ。ぐぼぼぼ……」

男は目を覚ました。目の前には均整がとれた顔立ちの美女が立っていた。神々しい美女は口を開いた。

「私は神です。あなたには幽霊になるか生まれ変わる権利があります。どうしますか？」

「そんなことよりもキスさせてください！ え、唇だったらいわよって？」

神様は呆れて

「キスなどしません。それではあなたは幽霊にでもなりなさい」

男は眠気を覚え寝た。また目を覚ますとそこは人が往来する街だった。男は自身が透けていて幽霊になっているのに気付いて喜んだ。

『ワイ、幽霊になったぞー！ 早速スケベな事をしよう』

幽霊は街中で美男子を見つけとりついた。

「よし、後は美少女をゲットするだけだ」

元幽霊の目の前を美少女が通った。

「ねえ、ねえ、君デートしない？」

「え、いいですよ」

その後元幽霊と美少女は食事をしホテルに入った。元幽霊は有頂天で言った。

「まさか、こんなに簡単に美少女とホテルにこれるなんて。ひゃっほーい！」

二人は衣服を脱いだ。元幽霊は美少女をまじまじと見た。小さいが綺麗な乳首、キュツとしまったウエスト、そして興奮し巨大化した立派なニス。元幽霊は動揺した。

「え、ペ、ペ ス！？」

美少女（美少年）は恥ずかしそうに言った。

「僕は攻め男です」

そう言うと美少年は元幽霊を怪力でベットに押し倒しキスを迫ってきた。

「キスさせてくださいーい」

元幽霊は涙目で叫んだ。

「嫌だーーーーー！誰か助けてーブチュ！」

{つづく}

## 新第2話 スケベな幽霊の孫再び

スケベな幽霊の孫は前回酷いめにあった。えぐいことばかりでここには書けない。だが諦めず、可愛い女の子をナンパしていた。

「やあ、君可愛いね。デートしない？」

麗しい顔立ちの女は元幽霊についてきた。二人は喫茶店で談笑し遊園地で遊び、その後ホテルにやって来た。元幽霊は服を脱ぎ全裸になった。女は言った。

「恥ずかしいから目を閉じてて」

元幽霊は「分かった」と言うとも目を閉じた。するとカシャンという音がして元幽霊は身動きが取れなくなった。元幽霊が目を開けてみると両手両足を手錠で捕縛されていた。元幽霊は慌てて言った。

「奈津子さんこれはどういうこと？」

奈津子は元幽霊を鞭で打った。

「痛い」

「奈津子さんじゃなく女王様とお呼び！」

今度は元幽霊の背中に口ウを垂らした。

「熱！ 奈……女王様熱いです、止めてください」

奈津子は右足を差し出し言った。

「お願いがあるなら誠意をみせて舐めなさい」

元幽霊は仕方なく舐めた。奈津子は鞆からデイルドーを取り出し元幽霊の尻に近づけていく。元幽霊はそれに気付いて懇願した。

「女王様それだけは勘弁してください！　お願いで、グワアー――  
――」

元幽霊は尻が裂けると思ったそうなの。

ふっづく



### 新第3話 諦めない幽霊の孫

「ニャオー」

猫が一軒家を外から覗いていた。中には着替えをしている女性がいた。割と可愛い。と女は猫を見ると急いで着替え外へ出て来た。そして猫を見るなり言った。

「猫に悪霊がとりついているわね。除霊してあげるわ」

そしてポケットから札を取り出し猫の額に当てた。

「グワー！」

元幽霊は猫にとりついて覗きをしていたのだ。元幽霊は猫から出て来た。女は喋った。

「悪霊め。成仏させてあげるわ」

そう言うと除霊師の女は黒いお札を放りながら言った。

「攻める、男好きの黒人！」

黒い札はマッチョな黒人に変わった。黒人は幽霊を見てよだれを垂らしている。しかも黒人の大根サイズの一物は臨戦体制に入っていた。幽霊は恐怖を覚え飛んで逃げようとした。しかし黒人がジャンプし幽霊を組み伏した。黒人は言った。

『Yes e can!』

元幽霊に迫る黒い大根（一物）。幽霊は暴れながら咆哮した。

『嫌だ——————！』

ぷっぷく

## 新第4話 ご馳走を食べる

スケベな幽霊の孫はご馳走目当てにドリビという大手の社長のとりついた。元幽霊は社長宅で妻に外食をしようと言った。壮年にはいつている妻は料亭を紹介してくれた。元幽霊と妻は二人でタクシーに乗り料亭に向かった。料亭では妻のお勧めの品を注文し食べた。メインディッシュはスッポンだった。食事を終えた二人は近くのビジネスホテルに泊まることになった。ホテルの個室に入ると五十代の妻が迫ってきた。

「あなた、私我慢できないわ」

歳をとっている妻は元幽霊の股間をスッポンの上から執拗に撫で回した。幽霊は恐れ声を荒げた。

「ヒギャー！ー！」

「あなた、スッポンを食べてここも元気満々でしょう。今日は私を可愛がってね」

妻は元幽霊を裸にし、元幽霊の股間に顔を近づけてくる。元幽霊は予想を超えた事態には叫んだ。

「グワァー！ー！ 止めてー！ー！」

元幽霊は恐怖に顔が引き攣った。

$\{\wedge U, U\}$

## 新第5話 唇に惹かれて

スケベな幽霊の孫は女子高に侵入した。目的はリコーダーにとりつき可愛い女の子に口づけしてもらうためだ。早速スケベな幽霊は教室に入り可愛い女の子を見つけた。

『よしあの子のリコーダーにとりつくぞ!』

スケベな幽霊は可愛い女の子が座っていた机のリコーダーにとりついた。そして時を待った。幽霊はリコーダーの袋の中にいたので外が見えなかった。リコーダー（幽霊）を袋ごと持って女の子が移動し始めた。そしてしばらくしてリコーダーの袋が開かれた。幽霊は

『口づけをプリーズ……うん!』

幽霊は動揺した。なぜならリコーダー（幽霊）を持つ女の子は目は小さく鼻は曲がっていてそばかすだらけの不細工な女の子だったからだ。その女の子は隣の席の女の子に言った。

「リコーダー忘れちゃって借りたんだ」

不細工な女の子はリコーダーを吹こうと口を近づけてきた。幽霊は取り乱した。

『NOーーーーー!』

幽霊は痛い目にあつた。今度こそという気持ちで別の美少女のリコーダーにとりついた。しかし、音楽の授業が無いみたいで夕方になり教室には誰も居なくなつた。幽霊は諦めて帰ろうとした。する

とリコーダー（幽霊）を持ち上げた。袋のチャックが開かれる。幽霊はラッキーと思った。しかしリコーダー（幽霊）が見たのは息が荒い男子高校生だった。男子高校生は

「ハアハア……奈美ちゃんのリコーダーだ……ハアハア」

と言うと大きく口を開きリコーダー（幽霊）をくわえようとした。幽霊は悲鳴をあげた。

「なんでこんなについてないんだー！　グエエー……！」

幽霊は自分の運のなさを嘆いた。

{}つづく{}

## 新第6話 肛門の恐怖

スケベな幽霊の孫は病院内にある薬局にいた。今度こそいい思いをしようと思論んでいた。一人の薬剤師は部下に言った。

「次の薬は座薬を袋に入れて」

患者さんが可愛ければそのまま座薬にとりつこう決めたのだ。薬剤師がうら若い美女に座薬の袋を渡した。幽霊は興奮しながらもその座薬の一つにとりついた。美女は車を運転し家に帰った。美女は旦那に言った。

「あなた座薬を買ってきたわよ」

幽霊は驚いた。

『えー!!』

旦那はお礼を言うと幽霊がとりついた座薬を一つ持ちトイレに入った。そして旦那はズボンとパンツを下ろし肛門に座薬を近づけていく。

『男の肛門は嫌だー！ー！ー！のわー！』

座薬（幽霊）は薬としての役割を果たした。幽霊は意気消沈した。

{}つづく{}

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1914i/>

---

スケベな幽霊

2011年7月2日11時02分発行